

2. 鑿行列どうぎょうれつに見られる歴史的風致

1 はじめに

(1) 鑿行列どうぎょうれつの概要

出雲地方では昔から、大きな太鼓のことを「鑿」と呼んでいた。伝統行事である「鑿行列どうぎょうれつ」は、鉄の車輪のついた屋根付き山車屋台だしむたいに、4尺（約1.2m）～6尺（1.8m）の鑿を打つ面を上にして2台または3台と並べて据え付け、笛やチャンガラ（金拍子）の囃しはやに合わせて打ち鳴らし、子供を中心に数十人が綱を引き、参加団体（十数台）が旧城下町の地区内を行列して練り歩く祭りである。

現在は毎年10月の第3日曜日に松江開府を祝う松江神社（祭神・徳川家康・堀尾吉晴・松平直政・松平治郷）の例祭「松江祭」の一環で行われている。



「鑿」を打ち鳴らす様子



「鑿」を叩きながら練り歩く様子



「鑿」を引く子供たち

（2）鑿行列の起源

民衆が鑿を打ち鳴らすこの「鑿たたき」は、もともとは正月に行われる左吉兆行事がルーツである。平安時代に京都で行われていた左義長（左吉兆）がそれぞれの地方に伝わり、出雲（松江）地方では正月に歳徳神（1年の五穀豊作・豊漁、家内安全を司る神様）を迎えて祭る行事として行われた。

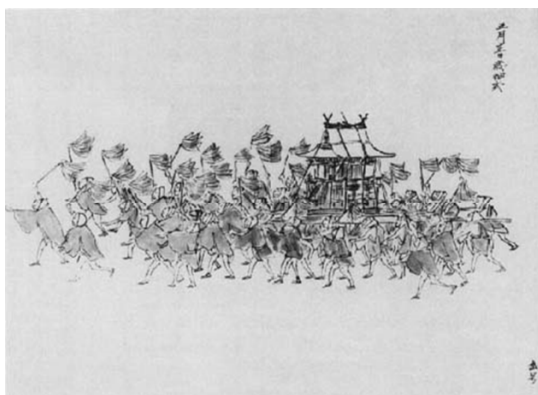
正月の元旦から種々の行事を行い、15日には「とんど焼き」を行うのだが、その間毎日鑿をたたき、歳徳神の神輿を担いで各町を練り歩いた。鑿をたたくということは神々をなぐさめる行事のひとつであって、豊作・豊漁、一家の繁栄は神が司ると信じていた当時は、その祭りも真剣で切実なものがあつた。

（3）江戸時代の鑿行列

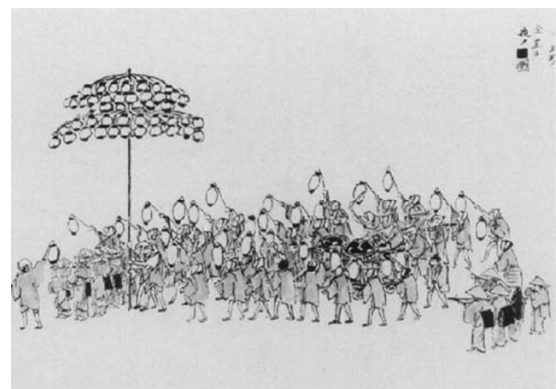
この左吉兆は、江戸期の松江藩においては武家地や町人地、さらに農村や漁村などで特色のある行事が練り広げられていた。

城下町においては、松江藩松平家初代藩主直政が入府して以来（1638年～）、毎年正月14日・15日（藩主が江戸に参勤する年は14日のみ）には武家の勇壮な左吉兆行事（馬乗り）が行われている。

その様子は、松江城の大手前広場に城内や家中屋敷の正月飾りを積み上げて真木小屋を作り、年男が火を付け、猛火に包まれた真木（神木）が恵方に倒れると、火事羽織に陣笠を付けた騎馬武者が競って城下を駆け回り、藩主も火事装束で激励したというもので、幕末の絵師堀櫟山（1856-1909）によるスケッチや、文久4年（1864）に実際に参加した松江藩家老三谷権太夫の江戸にいる藩主に宛てた手紙などから知られる。その武家の左吉兆行事の際に、町家の者たちは歳徳宮で練りまわり、おそらく鑿や笛などによる囃子も伴ったであろう、殿様の行事に賑やかさを添えたようである。



堀櫟山スケッチ（宮練り）



鑿練り

一方、町方や各村落などでは、歳徳神の祭りとして元旦から種々な行事や15日のとんど焼きがあり、この間鑿をたたき、歳徳神の神輿を担いで練り歩くなど、その年の豊作と家内安全を祈願した。

なかでも、城下町の町方では歳徳神の宮を祀る組み立て式の宮宿（2階建ての屋台）が建てられ、祝謡「若松」を謡って宮練り（歳徳神を祀る宮を担いで行列する）を行い、鑿・笛・チャンガラで囃し立てるなど、盛大に祭りが行われていた。

この正月のお祭りでは、12日と13日には庶民も内山下（重臣や上～中級武士の侍屋敷区域）に宮練り・鑿練りの体で繰り出すことが許されており、城の大手前でも大いに賑わい、その様子は藩主をはじめ多くの城下の人々が観覧していたのである。

（4）明治時代の鑿行列

この左吉兆行事（歳徳神の宮練り・鑿たたき）は、明治維新のころになるといよいよ盛んになるが、一方では、町方において、酒に酔って他町との喧嘩になるなどの酔余狂態を演じるといった弊害も出たので、明治3年（1870）には自肅の布達が発せられ、明治6年（1873）には明治政府から禁止令が発せられるに至った。

しかし、明治8年（1875）、明治天皇の誕生日である11月3日を祝う天長節において全国で祝賀行事を行うこととなった際に、島根県が天長節の前後三日間に限り各種の賑わいを許したことから、松江の一番の賑わいであった「鑿練り」を催しとして行った。

その様子は「三十三の町内が通りものを押し立て、鑿・笛・鼓・三味線を鳴らし、男女が歓呼して群行する（意識：『松江市誌』）」と記されている。これが各町内の鑿練りが行列形式となった「鑿行列」（行列しながら市内を練り歩く）の最初の実施例である。

すると、これを契機に旧城下町の町方では左吉兆の賑わいがいつしか紀元節や天長節の祝日の賑わいに移り、国民的な祝日や松江市の記念事業などに際しての奉祝・賑わいの行事として「宮練り」と「鑿練り」を実施する形で復活していく。

（5）大正時代以降の鑿行列

大正4年（1915）の「大正天皇即位大典記念」においては、各町内で別々に行われていた宮練り・鑿練りを1つにして大規模な行列の形にし、現在と同様に山車屋台で鑿を引き廻す形式のスタイルで行われるようになった。

元来、正月の左吉兆（歳徳神の祭り）をルーツとしてきた鑿行列（鑿練り）ではあるが、このような経緯により、旧城下町の町方においては国民的な祝祭

日とつながっていくことになり、「宮」と「鑿」の関係やその性質、実施の時期などを変化させることになった。

それは、(農村・漁村と同様に)正月の歳徳神の祭りにおいて宮と鑿が一体的なものであったころとは違い、江戸期には一体的であった宮と鑿が分離して、それぞれ「宮行列」と「鑿行列」という奉祝行事として行われるようになったのである。



大正4年(1915)の鑿行列〔今岡ガクブチ店提供〕

(6) 現在に至るまでの鑿^と行列

以降も、大正13年(1924)の「皇太子殿下成婚記念」や昭和3年(1928)の「昭和天皇即位大典記念」などで宮行列と鑿行列がそれぞれ催されており、また、昭和28年(1953)の「松江城上棟祭」や同34年(1959)の「市制七十周年記念」など、本市の祝賀行事としても鑿行列を行っている。この市制七十周年記念において市内の鑿が盛大に練り歩いたことをきっかけとして、翌昭和35年(1960)に「松江市鑿宮保存会」(現在の「松江市鑿行列保存会」)が創設され、これ以降は松江の開府を祝う松江神社の「松江祭」の一環として行われるようになった。

このように、祭礼・行事のスタイルは変化しつつも、城下町松江を舞台に庶民(町人)が支え続けてきたという面において、「鑿行列」の取組みは近世から現在まで一本につながっており、松江固有の伝統的な祭礼・行事を維持・継承するとともに、それを支える地域のコミュニティの形成にも大きな役割を果たしている。



「松江髻伝承館」（左）に保管される「髻台」（右）〔寺町〕



「宮宿」（左）の2階部分に安置される「歳徳神」（右）〔北寺町〕

2 建造物

(1) 松江神社

松江神社は、松江城二之丸にある。明治31年（1898）に「東照宮」※1を「楽山神社」※2に合祀し、明治32年（1899）に「楽山神社」が現在の地に遷座し、松江神社と改称したものである。その際、東照宮の建造物が松江神社として移築されている。棟札から本殿は寛永5年（1628）、拝殿は寛文元年（1661）に造営され、天保13年（1842）の修理で屋根が銅板葺となっている。正面鳥居には、慶安2年（1649）松平直政寄進の銘文があり、東照宮伝来とされる。

その後、昭和6年（1931）には松江開府の祖 堀尾吉晴ならびに松江藩の中興の祖 松平治郷を配祀して今日に至っており、秋の例祭は松江開府を祝うものである。

※1「東照宮」…寛永5年（1628）に堀尾忠晴が、徳川家康を祭神として朝酌村西尾に創建

※2「楽山神社」…明治10年（1877）に旧松江藩の人々が松江藩松平家初代藩主 松平直政を祭神として川津村楽山に創建



松江神社本殿



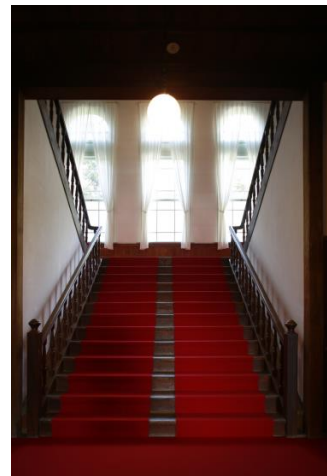
松江神社正面鳥居、拝殿

（2）興雲閣（島根県指定有形文化財）

興雲閣は、松江城二之丸、松江神社の隣にある。松江市が松江市工芸品陳列所として建てた擬洋風建築物で、明治35年（1902）12月に着工し、翌36年（1903）9月に完成した。当初、明治天皇の行在所（天皇が外出したときの仮の御所）に使用する目的でつくられたため、装飾・彫刻を多く用いた華麗な仕上げとなっている。結果的には天皇の巡幸は実現しなかったものの、明治40年（1907）、皇太子嘉仁親王（のちの大正天皇）の山陰道行啓にあたって、同年5月22日から25日まで行在所となり、迎賓館としての役割を果たした。昭和44年（1969）島根県指定有形文化財になっている。



興雲閣（島根県指定有形文化財）



興雲閣 屋内階段

（3）白瀧天満宮

白瀧天満宮は、旧城下町南部の白瀧地区にあり、「菅原道真」を祭神（天神）とする。松江藩の地誌『雲陽誌』（享保2年（1717））によると、保元年間（1156～1159年）に平景清が能義郡富田に富田城を築城し、天神を祀る社殿も建立したとされる。その後、堀尾吉晴が出雲領主として慶長年間に月山富田城（現在の安来市）から松江亀田山（松江城）に移城するにあたり、この天満宮をこの白瀧の地に奉遷している。平景清は富田城の築城の際に眼病を患い天神に平癒を祈願したところ一夜霊夢に現れた天神のお告げによってたちどころに治ったことから、これを深く敬い、築城とともに城内の霊廟として鎮守したという。

江戸時代においても、松江藩松平家3代藩主綱近が延宝5年（1677）に同じく眼病に悩み、景清の故事によって天神に平癒を祈り、遷宮を行っている。このときの棟札が現在の白瀧天満宮に残る最も古い時代のものである。

もともと城内の鎮守であった関係から城主が堀尾氏から京極氏、松平氏と変わっても天満宮に対する尊信は変わらずに強いままで、武士や町人たちもこれに習ったと伝わる。現在では、秋の伝統行事である「鑿行列」の終着点として神社前で「叩き収め」が行われるほか、夏の「天神祭」はこの辺りでも一番大きな祭りで、多くの人々がお参りをするなか、「鑿叩き」が天満宮の目前にある広場（天神ロータリー）で行われている。この広場は勢溜（軍勢の集合場所）であった場所で、城下町の名残を色濃く留めている場所でもある。

境内正面入口には、大正5年（1916）建設の文字が刻まれた石造の鳥居がある。



白瀧天満宮 本殿



白瀧天満宮 拝殿



江戸時代に勢溜があった白瀧天満宮前の広場



夏の「天神祭」の様子

3 活 動

(1) 鑿行列の参加町内・団体、鑿庫の分布状況

現在、28町内と3団体の合計31町内・団体が鑿行列に参加している。

【町内】

城北地区：石橋一丁目、石橋二丁目、石橋三丁目、北堀町三区

城東地区：北殿町、南殿町、東本町一丁目

城西地区：東片原町、東茶町、中茶町、西茶町、芋町、末次町
内中原町、土手大同会、中原町百姓町

白潟地区：和多見町、北寺町、南寺町、灘町、横濱町、幸町

朝日地区：伊勢宮町、大正町

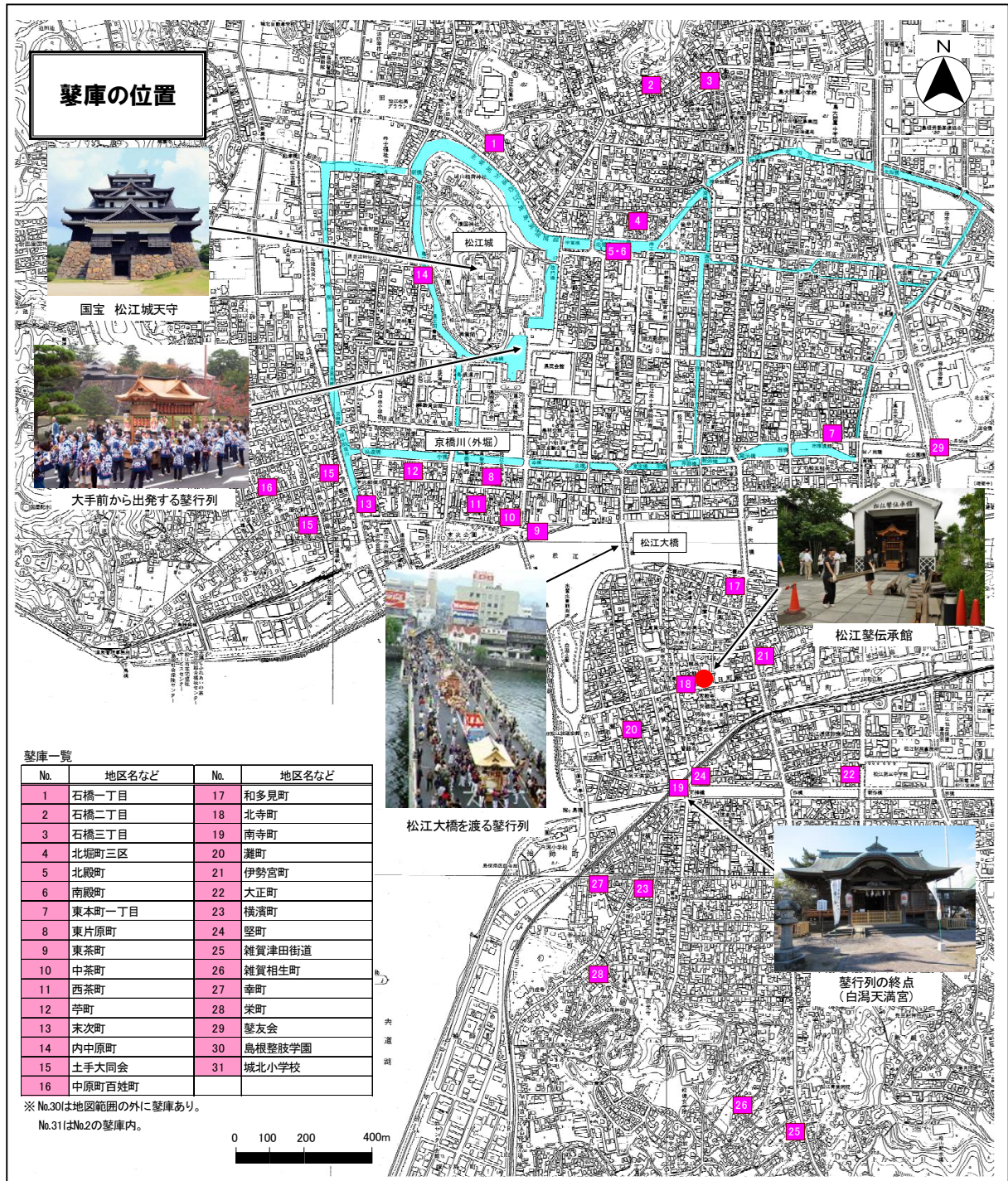
雑賀地区：鑿町、雑賀津田街道、雑賀相生町、栄町

【団体】 鑿友会、島根整肢学園、城北小学校

また、市内には参加団体の鑿を収蔵する鑿庫が30箇所あり、旧城下町エリアに広く点在している。（別図参照）併せて、歳徳神の宮も所有している地区では収蔵庫に安置され、現在でも地域住民の信仰の対象となっている。

参考

【松江鑿伝承館】 鑿叩き体験や諸活動、一般公開に使われる鑿宮（台）が展示され松江市鑿行列保存会で管理されている。



（2）鑿^ど行列の準備

- ・ 鑿行列当日から起算して約100日前にあたる7月の日曜日に「松江市鑿行列保存会」に加盟する31の町内・団体の代表者たちが、松江神社に一同に集い、参拝して、その年の松江祭開催の報告と祭りの安全祈願を行う。また、この場では神社宮司による籤^{くじ}引きによって行列の順番が決められる。この参拝を経たのちに、参加する町内・団体は鑿行列の練習を開始できる流れとなっている。
- ・ 近年の鑿行列には、市内31町内・団体のうち、当該年の参加態勢を整えることができる15～17の町内・団体が参加している。各団体によって違いはあるが、鑿行列本番（10月の第3日曜日）の約2週間前から連日集中的に練習する団体、9月上旬あたりから毎週土・日曜に練習をする町内・団体など、本番を迎えるまでの準備は様々である。
- ・ 練習の時期になると鑿庫^どから鑿^ゆを出し、緩めていた皮を張り直して練習を始め、たたきを重ねながら張りを徐々に調節していく。秋が近づいてくる9月になると各町内・団体の練習が始まり出し、夜になると松江の城下町のいたるところから独特の鑿の響き、また笛の音やチャンガラ（金拍子）が聞こえるようになる。
- ・ この練習の音は、たとえ離れて見えないところにおいても人々の耳に自然と心地よく入ってくる。鑿を所有し、行列に参加する団体は城下町エリアに広く点在しており、本番が近づくと城下町全体から鑿や笛の音が鳴り響くようになる。いわば初秋の松江における定番の「音の風情」ともいえるべきもので、これにより人々は秋の季節・鑿行列の時期の到来を感じる。
- ・ 鑿の「ドドーン、ドドーン」という音は腹の底まで響く重低音で、それに「チャカチャカチャッ」という軽やかなチャンガラの音と、「テロテロテロ、テロロロー」という流れるような笛の音が加わって、城下を祭りの気分^{いざな}に誘っていく。
- ・ 本番が近づいておよそ1週間前になると、各団体は鑿を乗せる鑿宮（台）を出し、飾りの提灯明かりが正常に点灯するかのチェックなど、メンテナンスを行う。そして、鑿宮に鑿を設置した形で本番さながらの練習を行うのである。
- ・ 近年では、祭当日の2～3週間前の夜に「鑿まつり」が、前日夜には「宵宮^{よいみや}」と称される前夜祭が催され、大橋川北側の橋北地区と南側の橋南地区からそ

れぞれ数団体が参加し、地区外の住民や観光客をはじめ多くの人に鑿行列の伝統に触れてもらうため、法被ほっぴを着ての写真撮影や鑿叩き体験ぞうたたきを提供している。



鑿行列の練習風景



本番前、町内での練習風景



「鑿まつり」で写真撮影や鑿叩き体験を行う様子



祭前日に行われる「宵宮」の風景

（3）^{どう}鑿行列の当日

a) 出発の式典

- ・10月の第3日曜日、島根県庁前の県道37号線の一面に、参加町内・団体が集合し、鑿を順番に連ねて待機する。
- ・近年は、12時30分に待機場所において、参加全町内・団体による「一斉^{どう}鑿打ち」が行われ、祭りの開会ムードを盛り上げる。



島根県庁前の待機場所に集まる各地区の^{どう}鑿



「一斉^{どう}鑿打ち」の様子

- ・13時から、松江城大手前駐車場に設けられた特設会場に参加者が集まり、出発前の式典と、安全祈願の神事が執り行われる。大手前から史跡松江城内にある「松江神社」の方角を仰ぎ、松江祭開催の報告と安全祈願を行うのである。
- ・元々は左吉兆^{さきちょう}行事の賑わいであった鑿^さ叩きを今日の鑿行列という形に変化させる大きな契機となったのも、明治8年（1875）の明治天皇の天長節^{てんちやうせつ}祝いや大正・昭和両天皇の大典記念であったことから、鑿行列は「松江神社」とあわせて「興雲閣^{こううんかく}」を仰ぎ見てから出発をする習わしとなっている。



出発前式典へ参集する町内・団体



松江城大手前駐車場特設会場での出発前の式典

- ・ 13時25分に、先頭の鑿が、県庁前の待機場所を出発し、順番に大手前駐車場の特設会場に入場する。ここで、「順改め」と呼ばれる儀式が行われる。特設会場には、主催者席と観客席が設けられ、多くの見物人が見守るなか、各町内・団体の代表は、奉行役に対面して、くじ引きの順番が記された木札を掲げ、自らの鑿の伝統や打ち方などの特徴を披露する口上を述べて通行の許しを請う。奉行役からは、当該町内・団体の伝統的な取り組みを讃える言葉とともに、通行許可の宣言がなされ、ここから各町内・団体の鑿が市街地の行列ルートへ繰り出して行くこととなる。
- ・ 大手前駐車場特設会場の位置は、江戸期に正月の武家の左吉兆行事や町人の祭りにおいて「宮練り」や「鑿練り」による賑いを見せていた場所であった。史跡松江城・国宝松江城天守を背景にしながら、全ての鑿がこの大手前から勇壮に行列をスタートさせていく姿は壮観である。



大手前駐車場特設会場へ入場する鑿



「順改め」の様子

b) 鑿行列の流れ

- ・ 鑿行列の行進ルートは、開催年度やその時期の道路・交通事情によって多少異なる場合があるが、現在の基本的なルートは、江戸期の祭り・左吉兆の時代から関連の深い大手前を出発点として、正月のときだけ庶民も鑿・宮で練り歩くことを許された内山下（重臣や上～中級武士の侍屋敷区域）の一部を通過して終着点の白潟天満宮へ向かうというものである。
- ・ 鑿行列は城下町の構造と暮らし、文化とのつながりのなかで発展・変遷をした祭礼・行事であることから、現代の我々もそれを実感できるルートといえる。この基本的なルートに基づいて、鑿行列と歴史的なまちなみが一体となって織り成す情景が、城下町松江の風情を一層引き立たせている。
- ・ 大手前を出発すると、大手前通りを東に進んでいき、「北殿町交差点」（鉤型の交差点）を右折する。

（参考）～鉤型～

松江の城下町が軍事的な配慮のもとに整備されていることを示す好例であり、合戦で敵軍が城下に押し寄せても、地理に不慣れた敵に容易に兵を進めさせないために交差点を微妙に筋違えにしたもので、「直進の妨げ」や「遠方の見通しを利かせない」などの工夫であった。城下町の地区には、ほかにもいくつか「鉤型」の残る場所があり、人々は日々の暮らしのなかで城下町の構造として残る当時の面影に触れている。



鉤型の北殿町交差点



城下町を舞台に、鑿の音を響かせながら威勢よく行列が練り歩く



鉤型交差点を進む行列（南殿町地点）

- ・その後、行列は鉤型の交差点を右折して南下すると、外堀（京橋川）にぶつかる。ここから行列は左折し東に外堀沿いを練り歩いていく。
- ・外堀を東進すると、鑿行列は「東京橋交差点」を右折し、南下しながら、大橋川に架かる「松江大橋」を渡って旧城下町の橋南の地へ入っていく。



外堀（きょうばし京橋川）と東京橋交差点



東京橋を渡り南下する鑿行列



松江大橋を渡って、しらかた白潟地区へ向かう鑿行列

（参考）～まつえ松江大橋～

この大橋は堀尾吉晴が月山富田城から松江に移城した際に、築城の資材を運搬するために建設されたと言われている。初代の橋は慶長13年（1608）に建設されており、現在の橋は17代目（昭和12年（1937）10月竣工）にあたるものである。御影石の欄干と擬宝珠、4つの灯籠が特徴で、川沿いのまちなみと調和して水郷松江の風情を醸し出している。



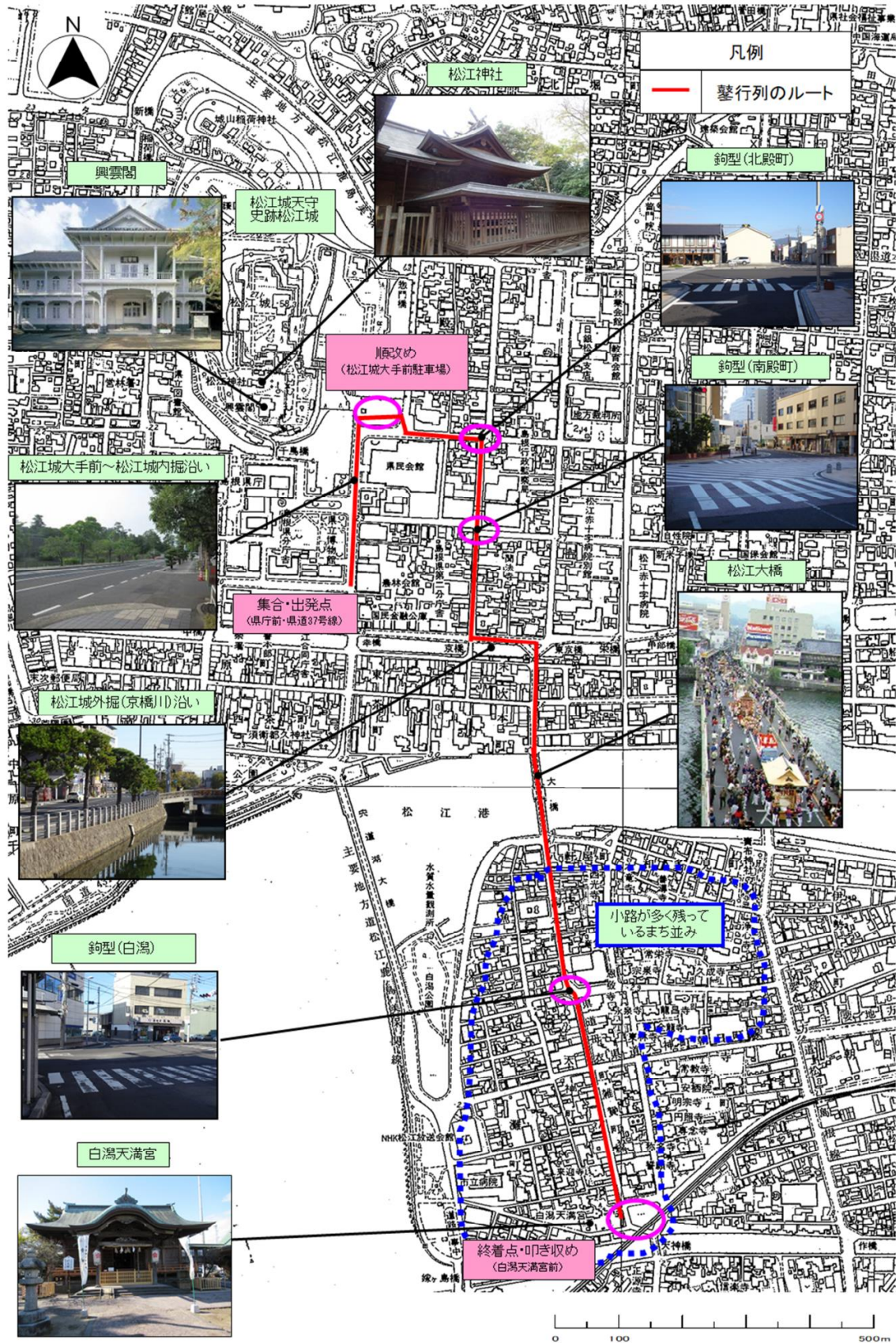
- ・松江大橋を渡ると、行列は小路が多く残っている白潟地区を通りどんどんと南下していく。行列が進行する通り沿いには多数の小路があり、江戸期には主に町人まちだった地域である。現在でも人々は日々の生活でこの幅の狭い路を生活道路として利用しており、行列がこのまちなみのなかを威勢よく通っていく。
- ・そして、終着点となる白潟天満宮まで行列を進め、天満宮前で「叩き収め」を行うのが恒例である。



江戸期に町人町として栄えた白潟地区（天神町）
終着点前、鑿行列と見物客で賑わう様子



白潟天満宮前での「叩き収め」



どうぎょうれつ
髙行列ルートと沿道の歴史的建造物

4 まとめ

このように、「鑿^ど行列」は、城下町松江を生活の舞台にしてきた町方の庶民たちが、農村や漁村とも違う独自の形を創出・継承したものを、現在も同じ城下町を舞台に各町内・団体が伝え続けている。それ故に城下町松江の特徴を示す代表的な伝統行事となっているのである。

歴史的風致のエリア図

どうぎょうれつ
 整行列に見られる歴史的風致

